

海外学術調査総括班フォーラム

「海外学術調査と総括班－時間、理論構築、ネットワーク－

東京外国語大学 石井 溥

1. 「海外学術調査」と「海外学術調査総括班」

ここでは、「海外学術調査と総括班」というタイトルで話させていただきます。当研究所は、(海外学術調査) 総括班の活動を、ここ 30 年くらいやってきておりますが、その活動を振り返りながら、海外学術調査と総括班とそれにまつわるお話をしたいと思います。その前にちょっと自己紹介ですが、私、この研究所で文化人類学を、主にネパールを対象として、村落調査を中心にやってきております。また昨年度まで、この海外学術調査総括班と称する組織の代表者をしておりました。

今日のお話ですが、科研と総括班と時間、理論、フィールド・サイエンス、それからネットワークというようなものがキーワードになるかと思います。ここで言う「海外学術調査」というのは、一応、科研の海外学術調査に絞らせていただきます。その科研の海外調査が始まる前、つまり前史の話も、振り返ることにいたします。

1.1. 科研費「海外学術調査」以前

もちろん海外での調査というのは、戦前から随分行なわれてきたわけですが、その話はちょっと飛ばします。第二次大戦後の海外調査は、科研費・海外学術調査が始まる以前から、本当はないないづくしの下で、既にかなり行なわれていました。振り返ってみて、これは非常に印象深いことだと思います。

「ないないづくし」、何がないかという、資金がない、国費はもらえてもごく一部ですし、もらうために非常に運動をして、それでようやく何か交付金というような感じで下りてくるということもあったようです。あとは募金に頼る。1年も2年も前から募金をしているというふうな、そういう形だったようです。それから外貨がない。外貨制限がある。大蔵省に行って、手続きをして外貨をもらわなければいけないというような時代でした。さらに渡航制限もありました。

そういう状況の中でも、外国に出て行なう調査は、既に 1950 年代には、活発に始まっております。ただ、しっかりした隊が出るのは 1955 年以降が多いようです。私は(先ほど申しましたように)ネパールあたりを調査対象としておりますが、ネパールへの学術遠征というのは、さまざまな調査活動の中でもちょっと特異で、1951年、52年、53年という早い時期にもう出ています。

この 1950 年代前半のネパールへの学術遠征隊は登山と対になった総合的な隊で、西堀栄三郎先生が道を開き、動物学・人類学の今西錦司先生、植物の中尾佐助先生、地理学、文化人類学の川喜田二郎先生というふうな方々が出掛けられて、われわれの研究にとっては非常に基礎的になる研究をまとめておられます。報告書は、(植物) 遺伝学の木原均先生の編で英文の非常に大きな本が 3 冊出ております。そういう成果をもうこの時代から出しているわけです。なお、この隊は(もともとは京大のプロジェクトですが)最終的には 1956 年のマナスル登頂という、日本の戦後のひとつの歴史をつくった遠征で終わっております。

1950 年代中盤くらいからは、かなりの隊が海外に出て行っております。日本学術振興会(学振)で出している『学術月報』の 1963 年 3 月号には、当時の「学術エクスペディション」の記事とリストが載っております。記事として載っており目次に出ている調査だけで 14 件あります。そして目次の最後に「戦後におけるわが国の主なる海外学術調査一覧」があり、その本文に 40 以上の

隊が記載されています。つまり、1955年から63年の約8年間に、40以上の隊が既に出ていることとなります。先ほどのないないづくしの中で、科研（海外調査）がない時期に、それだけ出ている。大変なエネルギーと時間を使って出なければいけない時期に、既にこれだけの調査がなされているわけです。

ここで、それらの調査のディシプリンを見てみますと、植物学、地学、民族文化、考古学、古人類学、天文学、総合的な調査等、多くのディシプリンが関係しております。地域の面でも、世界のいろいろな地域が既に対象になっています。ただし、まだこの時期では旧ソ連、中国、ヨーロッパあたりは対象地域になっておりません。

1.2. 科研費・海外学術調査／海外学術研究／国際学術研究

1.2.1. 略史

次に、科研費の海外学術調査の歴史のお話をいたします。科研費というのは、昭和14年、1939年に始まっております。人社系の科研費の始まりは、ちょっと遅れて、昭和18年、1943年です。そして、戦後になり、1963年に科研費の海外学術調査というのが始まります。それから1970年代、80年代とずっと伸びまして、1980年代に、がん特別研究、大学間協力研究、国際共同研究というふうな種目が出てきます。皆さん、覚えていらっしゃる方もおられるかと思いますが、1980年代になりますと、総合的で招へいも可能な研究、あるいは「共同」・「協力」などがキーワードになってくる。そういう方向性をもった種目が出てくるわけです。その中で、1988年に科研費・海外学術調査（等）が国際学術研究というふうに改称されます。その前に海外学術研究というのが2年くらいあったんですが、それは非常に短期間で終わって、国際学術研究という、皆さんにも割となじみのある名前が変わったわけです（図表1参照）。

1.2. 「科研費・海外学術調査／海外学術研究／国際学術研究」

1.2.1. 略史

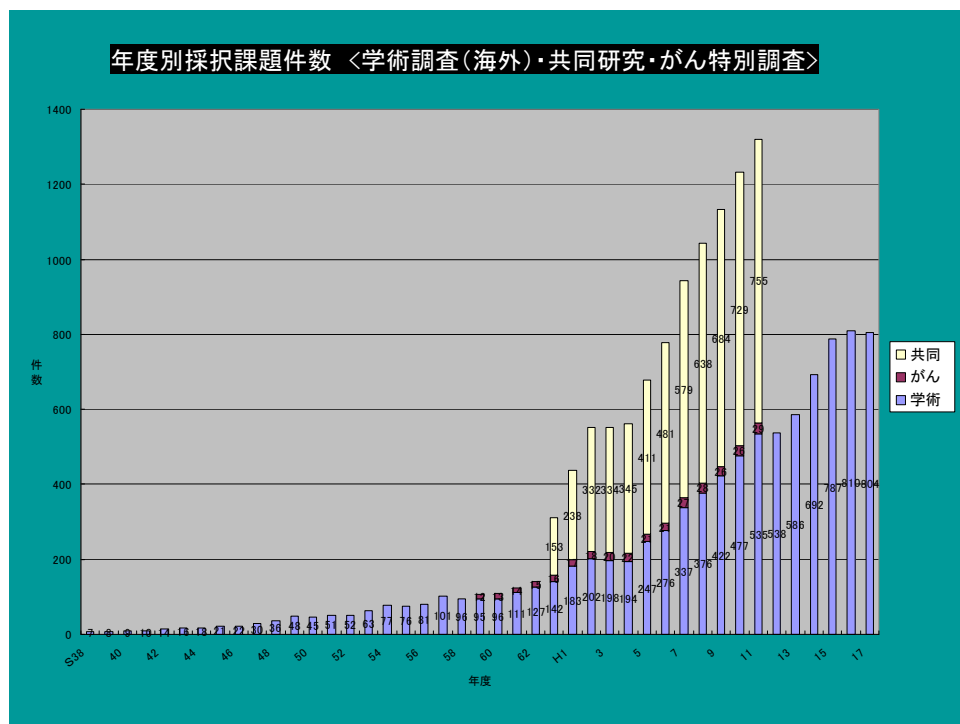
- 1939(昭和14)年: 科研費 開始
- 1943(昭和18)年: 人社系科研費 開始
- 1963(昭和38)年: 科研費「海外学術調査」開始
- 1984(昭和59)年: がん特別調査 開始
- 1987(昭和62)年: 大学間協力研究 開始
- 1987(昭和62)年: 科研費「海外学術研究」と改称
(含 学術調査、がん特、大学間協力研究)
- 1988(昭和63)年: (国際)共同研究 開始
- 1988(昭和63)年: 科研費「国際学術研究」と改称
(含 学術調査、がん特、大学間協力、共同研究)
<以上、文部科学省所管>
- 1999(平成11)年: 科研費「国際学術研究」から基盤研究に移行
<執行: 学術振興会所管>

(図表1)

1.2.2. 「国際学術研究」から基盤研究への移行

以上が文部省所管だった時期ですが、1999年にご存じのとおり、科研費・国際学術研究は基盤研究に移りました。そしてその執行は学術振興会に移管されました。それを踏まえつつ、年度別採択課題件数グラフ（図表2）を見てみます。一番左が昭和38年、1963年、一番右が現在、平成17年、2005年です。グラフの部分では、下の方の青いところが海外学術調査です。これは

国際学術研究のときには「学術調査」（「海外」の語の入っていない「学術調査」）という名称でしたが、近年また「海外学術調査」に戻りました。それがずっと伸びています。クリーム色の部分は「共同研究」で、濃い臙脂色が「がん特（がん特別研究）」です。これらは国際学術研究の中に入っていた時期があったので、それを足すと採択課題数は大変多くなりますが、「共同研究」はちょっと別にして見てみたいと思います。なお「大学間協力」はこのグラフからは外してあります。

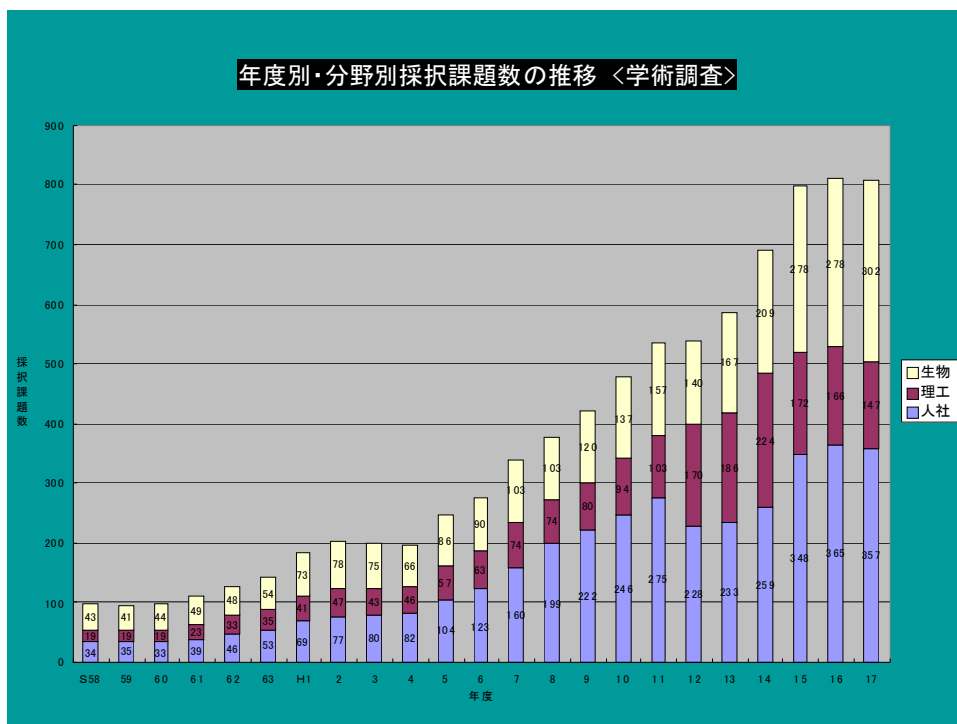


(図表 2)

以上を前置きにして、海外学術調査の伸びを見ますと、最初の年は採択7件、実質6件という形です。その合計金額は4200万円です。すると大体、1件700万円くらいだったわけです。この時代の700万円ですから、かなりよかったのかもしれない。20年後、昭和58年、1983年あたりで、採択課題件数は100件を超します。金額は11億くらいになります。

現在の採択課題件数を見ますと800件を超しております。そして金額は大体40億です。40年間で100倍というふうに大体言えるかと思えます。真ん中当たりの時期（1980年代）に10億円を超えて、現在40億になっているという伸びになっています。

次に年度別・分野別の採択課題件数の推移を見てみます（図表3）。人社と理工と生物に分けて伸びを示しています。青が人社、真ん中の臙脂色が理工、上（白）が生物です。人社というのは人文科学・社会科学です。理工系で海外調査が多いのは地学関係です。天文や建築等も理工に入っております。生物系で多いのは農学や生物・動植物学、それから医学・薬学系です。それらの海外学術調査がみんな伸びているわけです。始めのうちは生物系の方が多かったのが、だんだん時間がたっていくうちに人社のほうが比率としては多くなるという傾向も見えます。これは、基盤研究への移行とも関係がある現象かと思えます。



(図表 3)

平成 11 年（1999 年）から基盤研究に移行するわけですが、がん特以外の国際学術研究が基盤研究となり、がん特は特定領域に行きます。1999 年には例年の 5 月締め切りでの国際学術研究の公募がなくて、2000 年度の基盤研究でまとめて公募され、今の形のように締め切りが 11 月で内定が 4 月ということになりました。その前までは 5 月締め切りで内定が 11 月ごろに出るという形で、早めに決まっていたのですが、これは基盤研究への移行で変わって今に至っております。この変化のときには、我々の総括班が内定を早く出してくれるような形を残してくれないかと、いろいろ折衝をしたのですが、実を結びませんでした。

この基盤研究への移行のときに、基盤研究（A）、（B）に「海外学術調査」の区分が設定されました。そして、審査は一般の基盤研究とは別に行なうということになりました。それによって、基盤研究との重複申請の問題というのが出てきました。そこでは、「基盤研究との重複申請は原則として不可」とされます。ただ、「明らかに異なる研究を同一年度内に行なう必要がある場合を除く」という文言も公募要領に盛り込まれましたので、研究者側の選択の余地が出てきたということになります。この点については後で述べます。

1.2.3. 基盤研究への移行に伴う（「海外学術調査」の観点からの）問題点

制度的な面に関して、基盤研究への移行に伴う問題点というものを見てみます。まず審査区分の「海外学術調査」の定義のようなものを見ておく必要があるかと思えます。これは現在の公募要領の 5 ページにあるものですが、「主たる目的が、国外の特定地域におけるフィールド調査、観測又は資料収集を行うもの」と、フィールド調査、観測、資料収集の 3 つが挙げられております。従来は「外貨の使用を可能とする補助金制度」としての面が大きく、外に行くときは海外学術調査に申し込まざるを得ませんでした。非常にはっきりしていたわけです。審査区分としても別でした。

それが基盤研究に移行した後、基盤研究（一般）で海外渡航することも、ご存じのとおり、できるようになりました。ですから皆さんの中には、一般の基盤研究の分担者とか代表者とかになられて海外渡航された方々もいらっしゃるかと思います。そういう中で「海外学術調査」は審査区分としては別、別立ての審査委員会で審査されるという、そういう形になっています。けれど

も、基盤研究の一般でも外に行けるじゃないか。そうすると、制度的に別の審査区分にしていること、それには一体何の根拠があるのかということが、このごろ問われつつあります。

そうすると、そこでは、研究者・われわれがこの海外学術調査という区分を、本当に必要と考えているのかどうか、それも問われるということになるかと思えます。つまり、海外学術調査というのは、ほかの基盤研究の種目とは性格が違う、だから、これは別に審査してもらう必要があるんだということを、積極的に提示できるかどうかという問題がでてきます。海外学術調査とは何かということ、われわれ自身が考えなければいけないということです。

同じ問題をちょっと異なった面からてみます。海外で調査をする組織が科研申請に際して「海外学術調査」を選ぶことは、必ずしも必須でない。すなわち基盤研究の「海外学術調査」と基盤研究「一般」との間で選択の余地が出てくる。どちらに申請を持ち込む人も隊もあり得るわけです。すると、類似の研究を行なう2つ以上の組織が、同じ国・同じ地域に同時に入るという可能性も出てきます。相手の国によっては、一体これは何だ、同じような研究ならまとまって入ってくればいいじゃないか、と考えるところもあるかもしれません。

ただし、これに対する実際の制度的な対応は、今のところなされておられません。問題点の指摘というのはいろんなところでなされていますが……。研究者側から見ても、重複申請の問題は、かなり難しいものとしてあるわけです。これは公募要領の10ページにある表現ですが、「明らかに研究目的や研究計画・方法が異なる2つの研究をそれぞれ同一年度内に行なう必要がある場合は除きます」という言い方がなされています。基盤研究の「海外学術調査」と「一般」の両方への申請、重複申請は原則として駄目と書いてあると申しましたが、できるという余地もあるわけです。ただ、「明らかに研究目的や研究計画・方法が異なる」、それから「同一年度内に行なう必要がある場合は除く」という点の判断には、かなり裁量の余地があります。異なる目的ではあっても、今年行なう必要があるのかというふうに言うこともできるわけで、そこから重複申請は駄目だとされる可能性も出てきます。この辺は審査員によるのだろうと思えます。

1.3. 「科研費・海外学術調査」と「海外学術調査総括班」

1.3.1. 「海外学術調査総括班」の発足

科研の海外調査に関しては、そこまでにしておきまして、ここで海外調査と「海外学術調査総括班」のお話をさせていただきます。われわれがやってきた活動を初めから振り返ってみます。この「総括班」の発足は、1974年に東南アジアのある国で科研の調査隊が収集した標本の持ち出しをめぐってトラブルに陥ったことに関係します。それが新聞ダネになって文部省が困り、助成課長が調査経験の豊かな複数の研究者と懇談しまして、トラブルを未然に防ぐための方策を考えようということになったそうです。結果として、他の特定研究などと同様に、連絡調整のための総括班を置くことになったのです。それで最初は、そのころ東京農大におられた元東大教授の杉二郎先生を代表にして「海外学術調査総括班」を発足させました。これは非常に政策的に設けられた組織であったわけです。

この総括班は、昭和50(1975)年度に『科学研究費補助金(海外学術調査—調査総括)「海外学術調査に関する研究連絡及び情報の蒐集」』という1課題として発足し、その後も科研の1課題として続くということになりました。間もなく、この「総括班」は、この東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)の所長を長くやっておられた北村甫先生を代表とするという形で、ここAA研が引き受けるということになります。

1.3.2. 「海外学術調査総括班」の役割・寄与

この総括班の役割としては研究者および研究組織相互の連絡・情報交換の促進、それから研究者側と文部省との間の連絡調整、また関係資料の整備・充実、調査対象地域の実情把握(これは、なかなか網羅的にはいきませんが)、さらに、今日のような会合を開いたり、最初のころは計画

研究というのを検討したりということもございました。

主な寄与としましては、初期のころは、文部省が海外学術調査という科研をしっかり確立するために、一体どういう研究が必要であるか、この総括班に聞いてくるというようなこともありました。それにともない、大蔵省との折衝を支援する、関係資料をつくる、調査例を出すというようなことを、この組織が行なったという歴史がございます。それから、科研の研究が終わると実績報告書を出しますが、それを集めた『(海外学術調査) 実績報告書集』の編集・出版もこの組織が行なっております。過去の話です。それ以外に、科研・海外学術調査の制度に関して、文部省や学振などに意見を言ってきたということもあります。

この総括班からの提言が実際に実現したこともありました。年度を続けての継続調査、これは今、3年、4年続けて海外に調査隊を出せるということになっておりますが、最初はそうではなかったわけです。1年やって、1年空けて、また1年分アプライして、また空けて、という形だったのです。それを、調査を継続しないと研究に支障を来すなど不便だからと主張して、継続してできるようにしてもらった。そのようなことを提言によって実現したということもあります。それから大学院生の調査。これは、今、できます。それから、大学院生の単独行動、最初は駄目だと言われたのですが、それを何とかできるようになったのも、この総括班が働きかけて実現したことです。それから、資料調査が海外学術調査に含められたのも、この総括班からの働き掛けによる面が強かったかと思っております。

制度面での改変とは異なりますが、緊急事態突発に対応して、たとえば、今集まっていたような研究連絡会を臨時に開いて、事態の打開について話し合ったこともございます。その代表は、1989年の天安門事件のときで、既に中国での海外学術調査の申請が採択されていた多くの研究組織が、渡航規制が出されたことで、中国で調査ができなくなってしまうという自体が起きました。当該年度にできなくなりそうだと、どうしようかということで、文部省から話がありまして、総括班が緊急に研究連絡会を開きまして、関係の研究組織の代表者(等)に集まっていたいただいて、主にその年度にどうしようという対策を話し合いました。たとえば、調査地域をほかの国に替えるとか、隊によっては今年は取りやめるけれども来年度よろしくというふうなことを文部省が受け止めておくとか、さまざまな手が打たれました。これは緊急・臨時の研究連絡会の例ですが、ルーティンとしては、今日のこのような研究連絡会とか広報とかの活動もやってきているわけです。

1.3.3. 「海外学術調査総括班」の位置づけの変化

ただ、この海外学術調査総括班の位置付けは、だいぶ変化しております。先ほどお話ししましたように、初期には企画立案という面が強かったわけですが、だんだん時間が経つうちに、研究者の間の世話役的な位置付けに変わってきました。基盤研究への移行に伴い、科研・海外学術調査の執行は学術振興会に移管され、それによって、それまでの文部省との間でのこの総括班の政策的な二人三脚の運営ということがなくなります。学振は執行機関であって、政策には何も関与しないというふうな、基盤研究の移行に伴いまして、文部省から学振に移った担当部長に言われました。この総括班は海外学術調査の1課題として審査されることになり、今年度は先ほどの所長の話にありますように、研究所としてこのフォーラムを開催しているということになっております。

2. 海外での学術調査：時間と理論

2.1. 「海外学術調査」と理論と評価基準

先ほど、海外学術調査と普通の基盤研究(一般)とはどう違うのかという点を、われわれ研究者が考える必要があるという事態になっている、と申しました。そのあたりのことも含めて海外

学術調査について考えてみたいと思います。その取っ掛かりとして、私にとっては印象的だった、ある自然科学の研究者からの、海外での調査に対するコメントがあります。それは、フィールドワークだから既成の理論を利用するというで、それはそれでいいのだ、つまり、フィールドワークだからあまり理論形成に寄与しなくてもいいんじゃないか、というふうな発言でした。これは私にとっては、うーん、そうなのかと、ちょっと引っ掛かる感じでした。ただ、よく考えてみると、これもひとつの考慮に値する意見かなというふうに思い始めております。

ただし、科研・海外学術調査の公募要領の評定の基準、これは学振の科研費委員会で決められますが、それを見ますと、「研究目的の明確さ」、「独創性」、「当該学問分野、関連学問分野及び新しい学問分野への貢献度」等が挙げられております。つまり研究目的の明確さや学問分野への貢献と並んで、独創性というのが強調されています。今の公募要領には、オリジナリティーが評定においてかなり強く考慮される面があるわけです。他方、アメリカのNIH (National Institute of Health)、これは非常に大きな行政機関・調査資金提供機関ですけれども、その評価基準にあるひとつの表現として、「必ずしも革新的(innovative)でなくても重要(important)な研究であれば、それは評価」すべきではないかというくだりがあります。このような点を取り混ぜて考えると、先にあげた「フィールドワークだから常に理論が出てこなくてもいい」というコメントには、ある意味があると感じられます。

2.2. 海外学術調査と時間、理論

それで、海外学術調査（のちにフィールド・サイエンスという言葉も出しますが）、フィールド調査そのものの性格について考えてみたいと思います。最初のころは、先行研究や基礎資料がほとんど何もないところから出発する場合もあったわけです。そういうときはディシプリンを選ばないで、集められる情報は何でも利用する。一言で言えば博物学的な、また基礎的な記述が重要視されるような研究が行なわれる傾向があると思います。初期のころは確かに「何々の総合的研究」というような研究課題が結構あります。そこでは、何も分かってないから何でも調べようという姿勢があったのだらうと思います。

海外学術調査、または臨地調査・現地調査というときに、やはり複雑性とか多面性とか未整理のもの、極端に言えば混沌、に直面しなければいけないという面があります。これは、実験科学などとはだいぶ違う面かと思えます。

また、長期にわたるデータ収集が必要な研究も少なくありません。先ほどの、すぐに理論が出なくてもいいという見方は、この面との関連がかなり大きいと思います。たとえば、観測、観察、統計等ですね。同じ基準で取り続けないと比較ができないという種類の研究は、次から次へと新しい情報を出して基準を変えてしまったらしようがないわけです。もちろん、観測に関しても、聞いてみますと、基本的なところから異なる種類の観測があるとのことですので、一概には言えないようです。ただ、同じ基準で取り続けなければ意味がないというような研究は、われわれの分野には結構多いのではないかと思います。

つまり、フィールドワークをともなう研究での理論構築については、継続・蓄積の後に革新的な理論形成というものが期待されるということで、時間のスパンというのは、ここではだいぶ違うのだという気がいたします。すなわち、海外学術調査が「一般」と違うということのひとつは、継続とか蓄積とか、理論形成に時間がかかる等の点に求められる面にあるといえるでしょう。また、複雑性・多面性や未整理等の面に向き合う側面も強いと思えます。初期にはもちろん、非常に初歩的な資料収集も必要だったわけで、これは一般的にいろんなディシプリンに言えるかと思えます。たとえば歴史学などでは、史資料の調査、整理、蓄積等について、上記のことが当てはまるだらうと思っております。

海外学術調査に関しては、盾のもうひとつの面として、（狭義の）調査研究自体以外の諸要素があります。準備や、その対象の性質に伴うさまざまな手続きや気配りとか、事後の処理、そう

いうことに関して随分いろいろな面倒があります。調査対象の選定から調査対象社会に入ってなじむまでに時間がかかります。今日のお話の副題の中に「時間」と言葉を挙げましたが、理論形成だけではなくて、フィールドで活動を始め、実行し、また、それを終了させるのに時間がかかります。

カウンターパートとの間の関係の蓄積も必要で、これはもう時間どころではなくて、時間、手間、エネルギー、気遣い、いろいろなものが必要となります。調査相手との間でも、面倒を克服しながら、いい関係を築き上げていかなければいけない。私などは文化人類学ですので、人を相手にするわけですけれども、別のディシプリンの地学の研究とか天文の観測であっても、たとえば、相手の国の役所の人を相手にしなければいけない局面もあるかと思います。そういう人々が異なる時間（等）の感覚を持つということも大いにあり得ます。そういう人々と接触し、交渉し、折衝しなければいけない。国内で行なう研究に比べて、非常に手間とエネルギーが必要になるという面があるわけです。

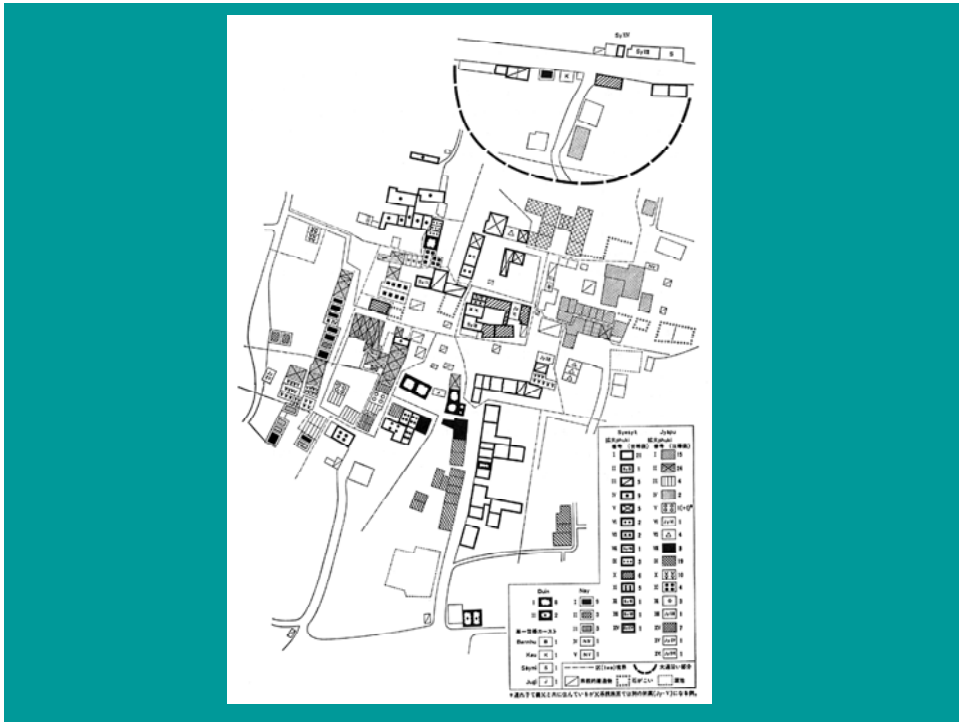
海外という異なる環境での研究・調査を遂行するためには、より長い時間のスパンで見なければいけないという面、また、異なる文化を背景とした異なる時間の観念に関わる側面もあります。その場合、ある種の機械に関していわれるような「あそび」といいますか、余裕をもって行動しなければ、海外調査はとても無理です。ぎりぎり秒単位で動いてはとても動かないというのは、これは皆さんご存じのとおりだと思います。事後処理、手当て、いろんな気遣い、たとえば、お礼ひとつ言う、書くというふうな、そういう気遣いも海外学術調査では大いに必要かと思えます。そんなふうを考えてみますと、時間、エネルギー、手間、それから気遣い、また価値観の違いへの配慮等々、いろいろ必要で、つまり（狭義の）研究調査以外の要素というのが、海外学術調査ではかなり大きな要素を占めます。初期のころのある調査隊の隊長の方が書かれたのを見ると、隊長の仕事の99%はそういう気遣いで過ぎてしまうということも書かれております。研究よりも周辺のこと非常に大きな比重があるということで、99%というのは極端な例かも知れませんが、海外学術調査の特徴として考えておいてよいと思います。

2.3. 海外調査の経験例：ネパール、カトマンズ盆地の集落

このように科研とか総括班とか、制度的なことばかり話していると、おまえは研究者として何をやってるのかと言われそうなので、この辺で私の研究についてちょっとお話しします。本当は私の研究の触りをお聞かせしなければいけないのですが、5分でやろうと思いますので、触りではなくて入り口、取っ掛かりのところの話を、ほんの短時間でさせていただきます。私が調査に入ったはじめのころに気になって、今まで引っ掛かっていて、次の話の学際的というところにもつなげられるかなと思っている問題です。

それは地図作りの過程で気づいたあることです。私は1970年にカトマンズ盆地のネワールという民族の村の調査を始め、その後、山地ヒンドゥーや低地のヒンドゥーの村の調査なども行なってきました（ただ、ここでは山地・低地ヒンドゥーの話は省きます）。主にカーストをもつ社会の社会構造と変化の研究です。ネワールの村の地図は、ネパール電気公団の電気配線のための地図というのを役所へ行って見つけ出しまして、それをベースにして作ることができました。

その電気公団の地図をベースにして作った村の地図というのが図表4「ネワールの調査村の地図」で、私の出版物に載せたものです。



(図表4) 「ネワールの調査村の地図」

ここはカースト社会でして、カーストと親族グループの分布を示すために、電気公団の地図を改変しつつ必要な情報を加えてあります。ただ、今日見ていただきたいのは、それらの分布ではなく、道が必ずしも南北に通っておらず、北上する際に真北より少し東に軸がずれているという点です。これ何でかなと思ひながら、あまり気にせず作業を進めて、こんな形で載せたのですが、その後、カトマンズ盆地の他の集落などの情報に触れて行くうちに、少なくともこれはカトマンズ盆地全体にわたる現象だということが分かってきました。

図表5はカトマンズ盆地です。直径 25km、標高は 1300km ほどです。私が調査した村はその西寄りにあります。



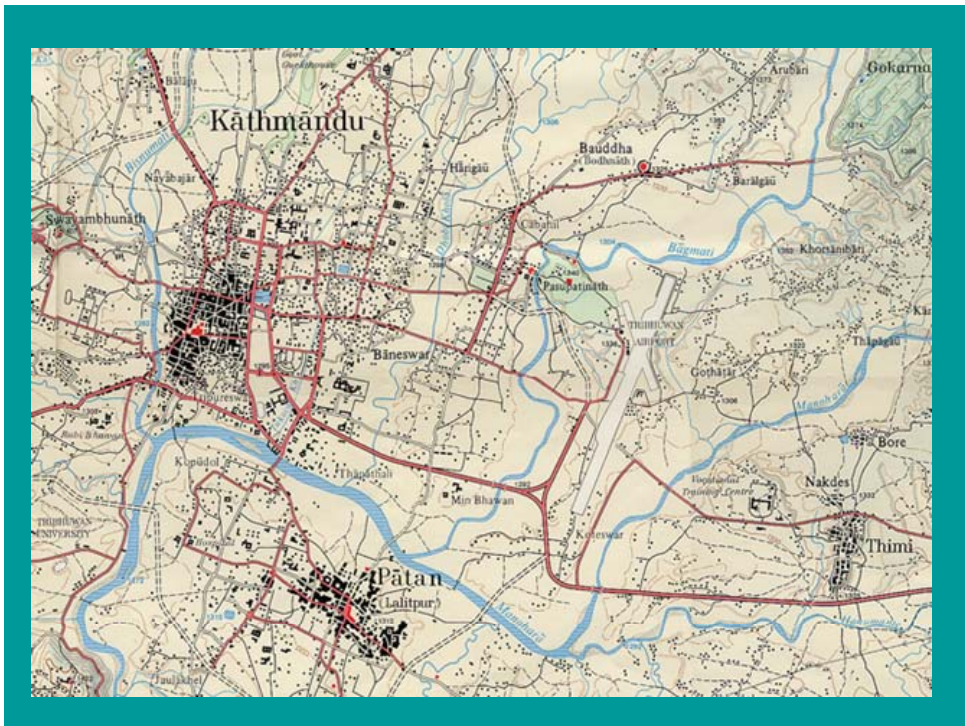
(図表5)

私が調査を始めた 1970 年代には、ドイツの人は地図ばかり作っているなど思っていたのですが、80 年代ころからはその基礎のうえに堅実な研究がいろいろ出ています。1985 年には（地図作り自体には直接加わらなかった）ドイツの地理学者によるカトマンズ盆地の諸集落の研究が出ました。その本の中に、カトマンズ盆地のネワールの集落は軸がみんな傾いているということを示す地図のリストがあります。図表 6 「カトマンズ盆地の諸集落」はその一部です。もとのページにはこの倍くらいの数の集落の地図が載っています。へえ、なるほどと思ったんですが、本文には、なぜそうなっているかということは何にも書いてありません。



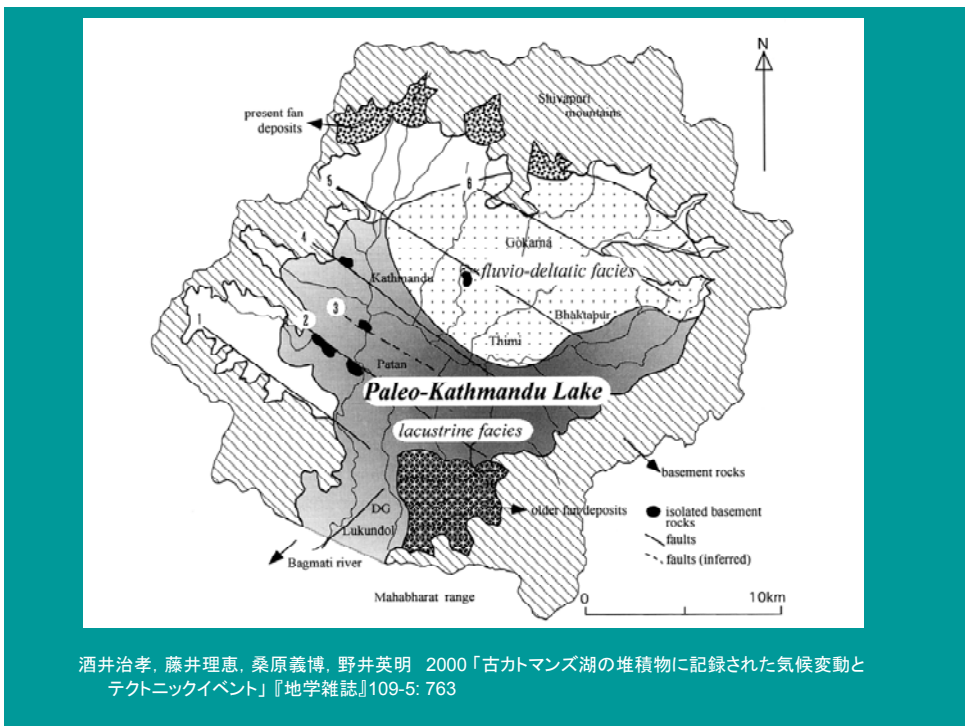
(図表 6) 「カトマンズ盆地の諸集落」

それはそれとして、最近、カトマンズ盆地の地図を見ていて、同じような軸の傾きがあることが、今度は、集落とは別の要素に関して気にかかってきました。図表 7 はカトマンズ盆地の中心部の地図で、首都のカトマンズ市、その南のパタン市などが左寄りにあります。中心部右寄りに、ほぼ南北に長く延びている白い部分が見えます。これは飛行場なんです。この飛行場がやはり南北の軸からは傾いています。真北を向いていません。ところで、飛行場の東西に川がありますが、これらの川の流れる方向は、北から真南へではなくて、南南西の方向にずれる形で流れています。これによって、飛行場も南北の軸から傾く形で造らざるを得ないということになったのだろうと、最近、思い付きました。



(図表7) 「カトマンズ盆地中心部」

とすると、カトマンズ盆地のいろいろな集落の軸が南北でなく、少々東西に傾いているというのは（この飛行場を示した地図でも見てとれますが）、どうもカトマンズ盆地の地形、地質、そういうものに関わりがあるのではないかと思います。それを先ほどのドイツの地理学者は指摘していませんが、このごろの日本の酒井先生等の地質の研究は、このような問題に関して大いに参考になると思っております。図表8はカトマンズ盆地の地質と古い地形の地図で、凡例に **faults** とある直線が断層を示していますが、やはりその方向は、東西南北の軸からは傾いていることがわかります。



酒井治孝, 藤井理恵, 桑原義博, 野井英明 2000「古カトマンズ湖の堆積物に記録された気候変動とテクトニックイベント」『地学雑誌』109-5: 763

(図表8) 「カトマンズ盆地の地質・古地形」

この酒井先生等のご研究も集落の軸の傾きに直接言及しているものではありませんが、どうも、こういうふうにさまざまな要素を並べてみると、カトマンズ盆地では、地表のいろいろなものの軸が傾いているという印象が深くなります。それについて、地質、地形的なものの影響があって、集落等の軸がみなこういう傾き方をしているのかと思ったわけです。ただ、そこを短絡的につなげるといふことに関しては「待てよ」という気も起こります。それぞれの集落のマイクロな立地条件や集落構築の伝統などを考えた場合、全部の集落の立地条件が、こういうふうに南北からちよつとずれて道や家々の配列の軸を傾かせる形になるのかどうか。これは、マイクロな個々の条件としては、意外に分からないのではないかと思います。その辺は地理学、地質学等々の方々の意見を大いに聞き、また、実地に調べなければならぬと思われまふ。それだけでも協業が必要です。

それから恐らくこれは、地理、地質だけの問題ではなくて、集落とか道とか家とかをつくる観念、このカトマンズ盆地の人々の間にある観念というのが関係しているはずで、人々は北とか南とかの方角は当然知ってるわけで、それに対してこういうふう集落の軸というのは傾けて造るものである、というような観念が、大工さんなり、レンガ積みの人なり、または町をつくる為政者なりの間にあるのではないかという気もするわけです。実際には私はまだその辺を追求してはいないのですが、そのような観念を調べるのも面白いだろうと思ひ始めております。これは建築学や都市工学の興味とも重なるかと思ひます。

また、時代的にさかのぼる歴史学とか考古学からの観点も必要でしょう。遺跡でどうだったかということなどは、大いに興味があることです。また、古い文書などにこれに関係する何らかの記述があれば面白い。さらに為政者に関わることなら法的な面も関係するかもしれない。そんなふうにと考えると、文化人類学から始まって、地理学から地質学から、建築学、都市工学、歴史学、考古学等々、いろいろな専門の知識・考え方等を複合しないと、こんな小さな問題も分からないのかなと思われまふ。いろいろなディシプリンの協業によって物事が分かってくるだろうということは、こんなささやかな例からも明らかに言えると思ひます。

3. フィールド・サイエンスとネットワーク作り

3.1. フィールド・サイエンスの可能性

この辺をちよつと枕にして、フィールド・サイエンスとネットワーク作りということでもとめたいと思ひます。フィールド・サイエンスの可能性として、今、申しましたような、場を共有した学際的な研究を遂行していくこと。これは従来もある程度、存在したわけですが、特に地域の総合的理解というような形で、たとえば地域研究はそのような方向を目指してきたと思ひます。他のいろいろな面でも、フィールドを共有した学際的な研究は有意義であると思ひます。もちろん、その前提として、地に着いた理論形成、場合によっては基礎的な資料固めなども必要で、

それから、カトマンズ盆地をまた例として持ち出しますが、軸の傾きの面では大変に斉一的な顔を見せるこの盆地の諸集落であっても、社会・文化等の面での調査を進めていきますと、実はカースト構成とか、親族組織とか、信仰対象となる神（仏）格とかは、隣の村と全然違ふという面がどんどん出てきます。直径 25 キロくらいのカトマンズ盆地においても、大変に複雑な様相を呈します。これは、大なり小なり他の国や地域でも当てはまることであろうと思われまふ。たとえば、当総括班が作り、今日お配りしてあります、昨年の海外学術調査総括班の活動の報告書に今までのワークショップや講演会等の記録が入っております。その中に、地質学、農学、生物学、医学、考古学等々いろいろな研究をしてきた方々の報告が入っております。それを見ますと、やはりフィールド研究というのは、大変に複雑な現象に向かい合う研究であるということが、印象深く受け止められるかと思ひます。

フィールド研究においては、多様な表現形とか事象の多面性とか「雑音（ノイズ）」に類する要素を、必ずしも排除しないということも、大きな特徴になるのではないかと思ひます。フィー

ルド研究と実験科学というのは、フィードバックしながら行なわれる関係にもあるわけですが、あえて切り離すと、実験科学では条件を単純化して見る面があります。フィールド・サイエンスでは条件を単純化しない、複雑性を理解しようとする。現にあるものをとらえて総体的に理解する方法というものを、何らかの形で探求していかなければならないのだらうと思います。

そういうものがもし追求できるとしたら、世界とか地球とか人間の理解という、非常に複雑なものの総合的理解ができるような学問の構築へと向かう可能性も生まれるのではないのでしょうか。世界像とか地球像とか人間像とかというものの構築、それは学問としては果てしなき夢かもしれませんが、そのような方向も視野に入ってくるかと思うわけです。

ここで付随的に、「フィールド・サイエンス」という語の早い時期の使用例について言及させていただきます。これは、このアジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）の初代所長だった岡正雄先生が、34年前に『学術月報』で使っておられる言葉で、ローマ字で field sciences という複数の表現になっています（岡正雄 1971 「海外学術調査」『学術月報』23(10): 1）。何かのご参考になるかもしれません。

3.2. フィールド・サイエンスをめざすネットワークへ

この海外学術調査総括班は、フィールド・サイエンスをめぐる、コロキウムとかシンポジウムとか講演会等も実施してきました。これからは、コンピューター上での情報提供・交換、さまざまなリンクの拡張、データベースの構築、その他の新しい手法の開拓などが、先ほど司会の真島さんが言われたように、必要なことだと思います。地域を中心とする先ほどのような学際的研究の促進、また総合的研究・調査というものを組織できれば、これも望ましいことかと思えます。科研の初めのころには総合的な調査研究がかなりありましたが、それは情報のあまりないところでの「総合的」な研究でした。それが進むに従って、専門化、分化が進んだわけで、それにより総合性というのが失われてきているという面は、さまざまに指摘されつつあるところではあります。

そういう中で、このIT化の時代に、諸種の情報を総合し、また今まで蓄積された研究を統合する形での総合的研究、そういうものが必要ではないか、そのための研究を組織することも必要ではないかと考えます。もうひとつ、この総括班がやってきたような海外学術調査に付帯する、つまり研究調査以外と思われるような、その他のいろんな問題を解決するための、または話し合うための情報の交換というものも、やはり大いに必要だらうと思います。研究関連情報として、研究者情報、科研情報、また手続きに関する諸事項（調査許可、入国ビザ、通関、ものの持ち出し等）や異文化社会での調査・交渉・折衝のノウハウ、さらに病気、事故、トラブルを未然に防止し、それが起こってしまった際に対処する方法、あるいは治安に関する情報、大きくいえば社会的な情報、危機への対処法等のノウハウを蓄積して共有することは、海外学術調査ではこれからもやはり必要です。

海外調査に付随するこれらさまざまな問題は、海外調査が行なわれ続ける限り、解消されることはないでしょう。研究調査の面と、（狭義の）研究調査以外の事柄への配慮・対処の面、その両方が必要であるということです。そして、そういう情報を蓄積し、交換するために、これはちょっと手前みそですけども、海外学術調査総括班的な活動というのは、やはり必要なのではないかと思えます。そういう中で対面的な情報交換、このフォーラムとか、地域的な分科会とかをやっていく。それから一方で、人・もの・情報の総合的なネットワーク化に努め、最終的には総合的学問としてのフィールド・サイエンスが目指せたらと思います。これはひとつの夢、理想ということになりますが、希望を述べつつ私の話を終わりにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。